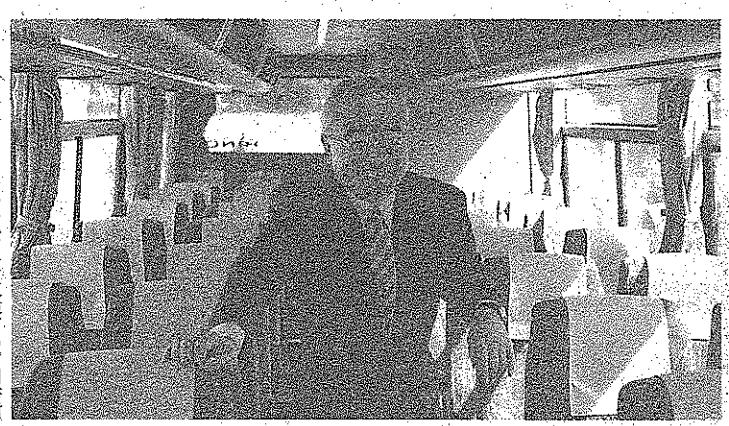
妻を支えて 今がある

介護時代
働きながら [2]



トイレつきバスを点検する富田秀信さん＝京都市下京区、小玉重隆撮影

長年にわたる介護。2人の男性は、ともに現在63歳。

午後3時。職場の壁時計で時刻を確認すると、富田秀信さん(63)は神戸市内のオフィスを離れ、足早に最寄りのJR元町駅へ向かう。

午後3時24分の米原行き快速電車に乗れば、午後5時前に京都市にある自宅に着く。午後5時過ぎには妻の千代野さん(67)がデイサービスから戻ってくる。

千代野さんは1996年春に心臓発作で倒れ、記憶障害などの後遺症が残った。

「ただいまです！」

女性職員の声とともに千代野さんが帰宅した。「よいしょ、よいしょ」。声をだしながら千代野さんが靴を脱ぐ。

「下着を替えてますから」「ああ、ありがとうございます」。洗濯物入りのリュックサックを職員から受け取り、お礼を言う。

午後8時ごろまでに妻を寝かせた後が、ほっと一息つける時間だ。ニュースを見ながら取引先のメールを確認する。電車でメモした企画案を清書することもある。

頼れるだけ頼る

千代野さんが倒れたとき、3人の子はまだ10代だった。妻の介護をどうするか――。絶望の一歩手前で、「頼れるところに頼れるだけ頼ろう」と腹をくくった。介護保険制度ができる前は精神障害者施設などに預かってもらったり、知人らにボランティアで朝夕の送迎をお願いしたりしたこともあった。

勤務する「国際ツーリスト・ビューロー」は社員11人の旅行会社だ。手厚い支援策はなくても、お互い顔の見える関係だから、事情を理解してもらえた。ヘルパーを頼むと家計を圧迫するため、なるべく残業はしたくない。そう訴えると、直行直帰や早めの退社を認めるなど柔軟な対応をしてくれた。ヘルパーの手配ができず、社の忘年会に千代野さんを連れて行ったこともある。

それでも両立は綱渡りの連続だった。4年前にはベトナム旅行の添乗直前に千代野さんが発熱した。短期入所を頼んでいた施設に伝えると「病院ではないので」と断られた。国内旅行と違って添乗員交代は難しい。ケアマネジャーと預け先を必死に探した。つてをたどって入院先を確保したときは、全身の力が抜けるようだった。

調整がつかず、退社が4時近くにずれ込むときは、駅からデイサービス施設にタクシーで直行することもある。

そんな介護生活を長年続けられたのはなぜか。富田さんは「介護経験を仕事につなげてきたから」だと言い切る。介護者の集いなどで体験を公表すると、医療・福祉の関係者の知り合いが増えた。広がった人脈は研修旅行などの受注につながった。

「介護や医療を自分の得意分野にして仕事を作り出し、認めてもらえばいい」

今年で介護19年目。富田さんの偽らざる思いだ。

悩み上司に吐露

親しい上司の前に立つと、涙が止まらなくなった。

「仕事を続けられない。辞めます」

「生きていくのがきつい」

外山努さん(63)が、上司に打ち明けたのは9年前。妻禮子さん(64)はその3年前、52歳で若年性認知症と診断された。

葬儀大手・公益社（大阪市）で、故人を入浴させて頭や体を洗う湯灌の仕事をしていた。体に負担がかかる仕事で、腰痛に苦しんでいた。こんな体調で妻の介護を背負えるのか。不安に押しつぶされそうだった。

43歳で転職して公益社に入社した。入社の頃から外山さんを知る上司の池内義彦常務(54)は、号泣する外山さんに言った。「辞めても仕事ないで。もうちょっと続けたらどうや。いろいろ考えてみるから」。介護の費用や73歳まで続く外山さんの住宅ローンを心配してのことだった。

その後、定時勤務ができる仏壇店に異動になった。仏壇店の閉鎖後は「地域推進担当」となり、商店街や介護の家族会などをまわり、親睦を深める仕事を続けてきた。60歳の定年後も、嘱託社員として働く。

勤務は午前8時45分からだが、朝の介護のため1時間遅くしてもらっている。

出勤前は時間とのたたかいだ。午前6時20分に目覚ましが鳴る。要介護5の禮子さんのおむつを替え、着替えさせ、車いすに移す。パジャマやタオルを洗濯機に放り込む。義母(85)が準備した茶がゆと金時豆の甘煮を、スプーンで妻の口に運ぶ。便秘薬の錠剤をすりつぶしてヨーグルトに混ぜ、食べさせる。

それから妻の歯磨き、足のマッサージ、ゴミ出し――。家を出たのは9時25分。座っていたのは茶がゆをかき込む2分間だけだった。

フルメーク日課

そんな出勤前にも、決して欠かさない日課がある。おしゃれだった妻のため、フルメークをするのだ。

化粧水と乳液を手にとって顔に伸ばす。化粧下地の後、コンシーラーでシミをカバーし、ファンデーションを伸ばす。ピンクのチークを入れ、アイブローペンシルで眉を描き足すと、次はアイメークだ。まぶたにピンクのアイシャドーを塗り、二重部分には少し濃いピンク、目尻には紫。リップブラシで口紅を塗り、グロスでつやを出す。

「美人になったね。お気に召しましたか？」

手鏡を見せると、目を閉じていた禮子さんが目を開き、少しだけほほ笑んだ。

（沼田千賀子）

◇

明日は、会社の支援制度をフル活用したNTTドコモの若手社員を紹介します。

体験語り、人脈広げ仕事受注■配慮の異動生かし、地域と親睦